春夏秋冬。

瀧陸瑠璃*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春夏秋冬。

【Ｎコード】
Ｎ７８３５Ｋ

【作者名】
瀧陸瑠璃＊

【あらすじ】
両親に捨てられ、親を知らずに孤児院で育った少女…春夏冬秋葉。
両親を殺され、祖父母に育てられた少年…音野愁。
ストリートチルドレンとして汚れた世界を見てきた少年…郡山岬。
心の奥に深い闇を抱えた子供たちが出会い、怪盗秋を名乗る。
そして…

プロローグ　「出逢い」ＳＩＤＥ春夏冬秋葉（前書き）

この小説は、推理小説オタクのわたしが書いたものです。
ですが、トリックなどは特に無い予定です。
心の闇や、両親の気持ちや、主人公たちの恋愛に重点を置きました。

これは、初投稿作品ですので、文章・表現がおかしい場合もあるかもしれません。
それでも良かったら読んでみてください。

プロローグ　「出逢い」ＳＩＤＥ春夏冬秋葉

子供が幸せだなんて、どこの誰が決めたんだろう？
一見幸せそうに笑っていても、心の中で悲しんでいるかもしれないのにね。
ｓｉｄｅ　春夏冬秋葉
わたしの名前は、春夏冬秋葉。年は１４歳、中学二年生だ。
アキナシ・アキハって読む…らしい。変な名前だと言われてきた。
秋があるの？ないの？意味不明じゃん。
普通、自分の名前が気に入らなかったらお母さんとか、お父さんに文句言うんだよね。でもわたしは、親に文句が言いたくてもその親の顔を知らない。

わたしは、生後１０ヶ月の頃に小さなカゴに入れられて孤児院の前に捨てられたそうだ。
オレンジ色の安っぽい毛布と、小さな紙。小さくてボロボロのカゴは、秋風に揺られていたそうだ。
その紙には、
「この娘の名前は春夏冬秋葉です
アキナシ・アキハと読みます。これから、どうぞよろしくお願いします
このまま、わたしたちが育てたら秋葉に苦しい生活をさせてしまいます
秋葉には、幸せな人生を送ってもらいたいのです
本当に申し訳ないです」
綺麗な、柔らかい字体で、橙色の色鉛筆で書かれてた。これは、お母さんが書いたものだろう。
女の人っぽい字面だし。
その紙きれを、わたしは今も持っている。毎日のように、広げて親

の仇の様に睨み付けていたから、四隅が擦り切れてボロボロになってしまっている。おまけに、小さい頃はこの手紙を見るたび、やる切れなさで涙を流していたから、丸い染みで水玉模様みたいになっている。
といっても、親が仇みたいなものだけど。
もしも、親に会った時、この手紙を見せて、子供だって事の証拠にするんだ。
そして、思いっきり文句を言う。そのために、持っているだけだから。そう、別に親が恋しいわけじゃない。その紙はいつも孤児院にあるわたしの部屋の隅のカゴに入れてある。
それに、わたしはもう泣かない。絶対に…泣かない。
泣くことは、両親に負けることだから。
自分が不幸だと、認めることだから。
「そういえば、わたしの誕生日って、いつだろう？」
やっぱり、秋なんだろうか。
小さく声に出した疑問は風に消された。
＊　＊　＊
今年からできたシルバーウィーク。生まれつき頭と運動神経と要領が良かったおかげで、宿題も終わって、部屋でぼぅっとしていた。
秋…この季節は、わたしが一番嫌いな季節。普通だったら、嬉しがるのかもしんないけど。
そう考えながら、孤児院の階段を昇っていく。
自分の名前に二つも入ってるんだもんね。でも、わたしには憂鬱でたまらない。
「はぁ…」
何ていうか、自分の名前の奇妙さが強調されるような気がして。
重い本と座布団を片手に向かっているのは、孤児院の屋上。
四階建ての建物でまわりは住宅地で低い建物しかないから、孤児院の屋上からの眺めはかなり良い。遠くの町や海まで見える。それに、夜にくれば月がとても近くに感じられるし。いつもわたしはここで

小説を読むんだ。
階段の先にある小さなドアを開けて、持ってきた座布団を置いた。
「涼しい…」
暑さに一段落した九月の終わり、心地よい風が吹いている。
わたしは、膝の上に置いた小説のページを開く。小さな黒い活字が、わたしの目に飛び込んでくる。
大人向けの推理小説…市立の図書館まで行って借りてきたもの。
ハードカバーの黒い表紙に真っ白いシルクハットとモノクル、紅の薔薇、不敵な微笑みを浮かべた怪盗が描かれている。その表紙を見ると、わたしはほぅっと息を吐いた。
わたしには名前の他に、もうひとつ変なところがある。怪盗が出てくる推理小説が大好きなのだ。小さいときから。そして、読むたびに叶わぬ妄想に浸りこむ。
いつか、素適な怪盗がわたしをこの退屈な毎日から救い出して、「パートナー」になってくれと言うんだ。
世界中の美しい宝石や美術品を盗み出す日々…。
わたしは心のどこかでそんな日々に憧れているのかもしれない。
それに、ただ、私利私欲のために盗み出すのではない。
まるでロビン・フッドのような義賊みたいな怪盗。もちろん、ジャック・ザ・リッパーのような猟奇的な殺人なんかは犯さない、義侠心と怪盗としての高いプライドを持ち合わせる妖しい盗賊。
警察を子供のように翻弄し、月を背に不適に微笑む…
「はやく救い出してよね…このままじゃ、わたし」
ダメになっちゃいそうだ。いっそ、この屋上から飛び降りてしまえば…。
ラクニナレルノカモシレナイ。
わたしは暗い考えを振り切るように頭を振った。
そんなコトを考えていたら寝てしまったみたいだ。
「早くぅ！早く、起きて！」
甲高い、ボーイソプラノの声。

ぐらぐらぐらぐらぐらぐら…。
わたしの肩を揺すってるのは誰…
まだ寝たいとせがむ頭に鞭打って、わたしは重い瞼を開けた。
眩しい日差しと、陽に焼けた浅黒い顔。頬っぺたに貼った絆創膏と
きょろきょろする大きな目玉。
きじまあらたくんだ…。来島…新くん。
どうしたんだろう…
「秋葉姉ちゃん！もう夜ご飯の時間だよ！」
夜ご飯…ああ、空は真っ赤に染まっている、もう夕方になってるのだ。
「え…あ、ゴメン！すっかり忘れちゃってた…あはは
「あははじゃないよぉ、秋葉姉ちゃん！」
新くんはぷくぅと頬を膨らませ、恨めしげにわたしを睨みつけた。
「そだね、ごめん。じゃ、急いで行くね！」
「ボク、お腹空いてるから先に下行ってるよ！」
そう言うと、新くんはぱたぱたと階段を降りていった。
わたしは、途中まで読んだ小説にしおりを挟んでぱたんと閉じる。
もし、弟がいたらこんな感じになるのかな？
なんて、これこそ叶わない夢じゃん。
屋上から孤児院へと続く階段を降り始めようとした、その時。
空気をかき乱すような音がして、後ろを見た。
バサバサバサ…
強い風がどこからともなく吹いてきて、わたしの長い髪を靡かせる。
風に逆らうように眼を開けると、そこにあったのは桜色に塗られたヘリコプター
…機体には「春坂財閥」の文字がペイントされてる。
春坂財閥…旧財閥のひとつ。多くの傘下会社を抱え、現在は海外への進出をも考えている。
国内での権力は計り知れないほどで、警察の幹部や、有力政治家とも繋がりがあるとも言われている。

教科書で読んだ内容…そんなすごいところのヘリコプターが何で？
と、そこから飛び降りる黒いスーツの男の人…。
どう見ても地面から5メートルは離れてるけど…大丈夫？怪しむ前に心配してしまう。
音も無く屋上に立つと、その人はわたしをじっと見つめた。まるで、頭の中にあるデータとわたしを照合しているみたいに。
そして、小さく、小さく頷くとわたしに向かって歩いてくる。
データとの照合完了、捕獲します―そんな声まで聞こえてきそうなシグサだ。
「春夏冬秋葉様ですか？」
低く、感情の入っていない声。
服装は、皺ひとつない真っ黒いスーツと白いワイシャツに黒のチェックのネクタイ。
ぴかぴかに磨かれた黒い革靴がこの人の神経質さを表している。
完璧すぎて、造られたものみたいだ。
「…そうですけど…あなたは？」
「失礼、申し遅れました…」
そう言うと凄いスピードで右手が動き、背広の内側から名刺が出てきた。
真っ白い無機質なデザイン。愛想の無い黒い文字で「春坂財閥常務取締役春坂美月第一秘書　佐伯惣一」と印刷されている。
「え…ありがとうございます」
なんとなくお礼を言わなきゃいけない雰囲気になって、わたしは会釈をした。
「…？」
って、質問の答えになってないんですけど。変だ、この人。”フツウじゃない”雰囲気がする。
「ゴメンなさいねぇ！」今度は上から声が振ってくる。
男の人…佐伯さんと違って、きゃぴきゃぴしてるおばさんの声。
そして、飛び降りてきたのはどこかで見たことのある綺麗なおばさ

ん。
４０才くらいかな？
犬のプードルのようなくるくるした茶色の髪の毛。隙間無く化粧された顔、ヘリコプターと同じ桜色のパンツスーツ。
「いえ、あの誰なんですか…」
「あたし？あたしはね…春坂美月。そこの佐伯はあたしの秘書」
うふっと笑って、おばさんは長い髪をかきあげた。ふわっと香水の匂いが漂ってきて、何か言わないといけない気がした。わたしは取り敢えず「どうも」と会釈した。
唐突に、ホントに唐突に「ねぇ、怪盗春って知ってる？」と聞かれた。
「ええ…常識程度に」と、わたし。
びゅぉおうと、風が吹き抜ける。
二年くらい前まで美術品やら、宝石なんかを盗んでた…。ま、今はもう活動休止状態みたいだけれど。確か、女の人だったよね。
真っ黒いスーツとシルクハットに、モノクル。典型的な”怪盗”スタイルの。彼女はわたしが推理小説を読むようになった切っ掛けだ。
「わたしの正体は、怪盗春なの」この人、頭イっちゃってるんじゃないだろうか？
確かに、前に新聞で見た不敵に笑っていた写真とどことなく似てるかもしれないけど。
けど、それだけでしょ？そう言ったわたしの言葉を無視して「でも、もう年でしょ？だから、体的にちょっとだけ、辛いかなぁ…なんて部分があったりするわけね。あ、ホントちょっとだけ。まだ、３９歳だしぃ。もう引退しても良いんじゃないかなぁって。そこの佐伯に言われちゃってぇ！でも引退して正解かも？今じゃ天才美人実業家だもんね！あは、誰も呼んでないって？それでね、でも、やっぱり怪盗が好きなの。うん。本当に引退するのは嫌なのね。ご隠居、とか言われるの嫌だし！だからぁ、弟子を取ろうと思ってぇ。わたしは、その弟子たちのブレインってわけよぉ！ちょっとカッコ良い

でしょ。なんとなく。それで、とりあえず、あなたと音野愁クンに決定したってワケ！どお、完璧な状況説明でしょ？」
息継ぎせずにものすごいスピードでこの言葉を告げられる。頭がついていかない！！でも、変なトコロが多すぎる。そもそも、この人たちを信じていいの？
「愁クン。降りてきなさい？」
わたしの心を見透かしたように、春坂さんが言った。
ヘリコプターが風を起こしながら降りてくる。
地面スレスレのところまで降りてくると中から、わたしと同じくらいの男の子が出てきた。
だからつまり…中一くらいって事。
どことなく色素の濃い顔。濃い黒色の髪の毛。瞳は、茶色。真っ黒に日焼けした肌。太い眉にキリッとこっちを睨み付ける瞳。
目鼻立ちは整っててかなりの美形。それに…この人、何処と無く黒い暗い雰囲気を持ってる。
肌と対照的な白いワイシャツとチェック柄のベスト、ベストと揃いのロングパンツ。
ヘリから降りて来ると「美月さん、この子と怪盗名乗るんか？」と美月さんに聞いた。
え…大阪弁だ。テレビの中でしか聞かないやつ。

プロローグ　「出逢い」ＳＩＤＥ音野愁（前書き）

プロローグのＳＩＤＥ音野愁です。
よんでいただけると嬉しいです☆

プロローグ　「出逢い」ＳＩＤＥ音野愁

ＳＩＤＥ　音野愁

子供が幸せやとか、誰が決めたんやろうか？

おれは、全然幸せやなかったで…おれの名前は、音野愁。大阪生まれの１４歳や。

親の顔を写真と微かな記憶でしか知らんねん。おれが三歳の頃、死んでし…死んだんとちゃうな。

両親は、殺されたんや。犯人はおれの家の隣にあったアパートに大学に通うため、住んでたお兄さん。アパートの花壇に、毎日欠かさず水やりをしとった。まだ小さなおれの記憶の中では、ニコニコと微笑んどった。

「愁くん、僕の夢はね、植物学を研究する学者になることなんだ」

お兄さんが喋る言葉は、おれらの大阪弁やなかった。テレビのニュースとかで流れるような、不思議な言葉。それを標準語だとわかるにはおれは幼すぎたわ。

「しょくぶつがく？それってなんやのぉ？」

「簡単に言えばね、お花や草を研究して、もっと綺麗なお花を咲かすようにしたり、美味しいお野菜が出来るようにしたりするんだ。

愁くんには、この説明じゃ難しいかな」

そう言って、おれの頭をくしゃくしゃとなでた。

「よぉわかれへんけど、兄ちゃん、スゴいんやねぇ」

両親が殺されたときの事は全然覚えてない。

ただ、そのお兄さんが包丁を握り締めて嗤っていたことだけが記憶に焼きついている。

人はものすごく苦しかったり辛かったり怖かったりした記憶に蓋をしてしまうらしい。おれは時が経つたびに蓋の上に重しをたくさん乗せとる。怒り、苦しみ、悲しみ、憤り…そんな感情ちゅー名前の重しを。

もうこのコトについて考えんのはヤメや。気分が滅入るし、ええコト無いわ。
おれは両親が殺された後、祖父母に引き取られた。ところが、その二人も一ヶ月前死んでしまった。
もう、誰もいてへん。
親戚連中はおれみたいな「お荷物」を預かるのは御免やそうや。まぁ、近頃は不景気やしなぁ。
そして数時間前…。おれが、孤児院に入れられかけたとき。
春坂美月さんがその秘書であり雑用係であり運転手でもある佐伯はんの二人がヘリで来た。
師匠は職員に「わたしは春坂美月よ！」と、名刺を手裏剣のように撒き散らし。
職員がドン引きしてる隙に佐伯はんがアタッシュケースから１００万円を取り出し。
あっと言う間におれはこの春坂美月っちゅーオバハンに引き取られるコトが決まったんや。
そしたらおれをこのヘリに乗せて、身の上話を始めてん。
「わたしの名前、知ってるかしら？」
そして、知らないと言うおれの言葉を待たんと「春坂美月≪はるさかみづき≫…」
と低い声で呟いた。それまでの高くてきゃぴきゃぴした声が一瞬で変わった。
「わたしは、数年前まで怪盗春として活動していたわ」
怪盗春…その名前は、聞いた事があった。
天才的な怪盗として宝物や美術品を数多く盗み出し、国際警察機構―かのＩＣＰＯでさえ逮捕できなかったと言われとる。
「あら、お褒めの言葉、嬉しく頂戴いたしますわ」
くすっと怪しく笑った美月さんは誇り高き系譜を受け継いでゆく、怪盗のもんやった。なんやろう、きつねに化かされたみたいな気分や。

「ほんでおれを、ゆるぅい監禁状態にして、どうしようっちゅーんや？」
「弟子よ、弟子」フン！と鼻で笑われた。
「そんな事も分からないの？」とでも言いたげに。
「あんたと、もう一人で怪盗チーム…怪盗秋を名乗ってもらうわ」
「おれには話が読まれへんわ。すまんが、断らせてもら…「断らないでよ？」と同時にこめかみに冷たい感覚。横目に見ると、黒い銃身がおれのこめかみを当てられていた。
「…脅す気なんか？おれを…」
「ええ。受け入れてくれないと、今すぐ引き金を引いてもらうわ。ガキが一人死んだって、この世界は変わらない。そうね、ただ事故とでも言う？春坂財閥の力は大きいわよ」
そう言って師匠は口角だけを恐ろしいほど綺麗にあげた。もちろん、眼は少しも笑っていない。
ヘリの羽音が、早く観念しなと言ってるようだった。
「わかった…おれが、怪盗秋とやらになればええんやろ」
金持ちの我侭や、聞いて損はせえへん…そんな気持ちで、おれは承諾した。
この約束がおれの人生を正反対の方向に向けるとも知らずに。
そやけど、転がり始めた石は止まらない。
「やったぁ！ありがと、音野愁君。それじゃぁ、今日の予定はね、孤児院であんたの相棒との初対面！」
美月さんの微笑みは、新しい玩具を見つけた子供のようだった。
「相棒？何や、それ」そんな刑事ドラマ、あるでな。
「喜べ少年！あんたの相棒になる子は超美少女よ？」
「はぁ…それは、どーも」
おれは小さく呟くと、窓の外の景色を眺める。
都会でも無いけど、田舎でも無いわな。中規模の地方都市って感じや。
「ここで停めて頂戴、佐伯」

そう言って止まったのは、どこか古ぼけた建物の真上。
屋上には一人の少女とボウズ。
ボウズは拗ねたような顔をして、少女に話しかけてる。
少女は、ボウズを包み込むように微笑んで…ボウズは頬を膨らませると階段を降りていった。
少女は手に持っていた小説を閉じると階段に向かい、何かに気づいたように後ろを振り向く。
一瞬、おれの記憶にある母親の笑顔と重なった気がした。
「あの子がおれの相棒とかゆう子なんか？」
「そう、春夏冬秋葉ちゃん。春、夏、冬、秋に葉っぱの葉でアキナシアキハって言うの」
変な名前やな…秋があるんか、ないんかわかれへん。
ヘリはゆっくりと降下していく。その瞬間、運転席から佐伯さんの姿が消える。
そして、屋上に飛び降りると何やら話し出した。アイツ、化けもんかいな。
怪訝そうな顔をする春夏冬秋葉を見ていた美月さんは「ゴメンなさいねぇ！」近所のオバハン風に怒鳴った。
そして、ヘリから飛び降りた。うわ！この美月さんも化け物かいな！ほんまにあんな約束してもて、良かったんやろうか？おれは、急に不安になってきてもた。
「愁クン。降りてきなさい？」美月さんの声で、ハッとする。
「え」この高さから？どう低く見積もっても3メートルはあるで？おれの気持ちを読み取ったように、ヘリが下降しはじめる。
地べたに当たりそうな程スレスレの位置まで下がると、ピタリと静止する。
おれは恐々とヘリから降りる。地上に立った瞬間、開放された気がした。
そして、おれは目の前にいる少女…春夏冬秋葉を見つめる。
綺麗な子やな…白黒写真に撮ってもあまり変わらないような容姿や。

真っ黒くて長い髪の毛、同じく黒い瞳…。そして、真っ白い肌。
服は秋なのに長袖の黒いロンＴ。無地やけど、胸元に小さな白いシルクハットの刺繍がしてある。細っこい足を包んでんのは黒っぽいスキニージーンズ。唇だけがピンク色で何となく目立っている。
身長は１６５くらいで、けっこう高いけど、おれが力入れたら折れてまいそうな程の細さや。
でも、出るべきところはちゃんと出とって…あれや、人形みたいや。
作り物の人形みたいや…。

プロローグ　「出逢い」ＳＩＤＥ音野愁（後書き）

どうだったでしょうか？
まだ結末も定まっていないのですが（笑）
駄文で申し訳ございませぬ…。

第一話　蝋燭を燈して

春夏秋冬。　第一章　「蝋燭の灯り」　瀧　陸　瑠　璃

ｓｉｄｅ　春夏冬秋葉

「孤児院の、あなたのお部屋…あるでしょ？上がらせてくれるかしら。わたしは、あなたを引き取って怪盗として育てたいのよ」

春坂美月と名乗ったおばさんは、まるで昔からの知り合いかのようにわたしに微笑んだ。

引き取って育てる…その言葉はまるで綿菓子のように甘くて軽くて。

「え…あ、はい」思わず、頷いてしまった。

わたしは、美月さん、佐伯さん…と愁っていう男の子を連れて、ぞろぞろと階段を降りていった。

わたしの部屋は孤児院の奥のほう、角部屋だ。一応、年頃の女の子ってコトで狭いけど一人で一つの部屋を使わせてもらってるの。

屋上には一人で行ったのに、帰ってきたら三人も人を連れてきたわたしを孤児院の子たちがきょろきょろと見つめてる。

「あらあら、どうしたの？秋葉ちゃん」台所から割烹着を身に着けた院長先生が出てきた。

わたしたちのおばあちゃんみたいな存在だ。名前は、崎川灯子先生。この孤児院は、先生の名前から蝋燭孤児院という。子供たちの心に、蝋燭のような灯りを燈せるように。小さくても、暗闇で暖かく照らせるように。そんな意味もあるそうだ。真っ白い髪の毛をいつもお団子にしていて、橙色の丸メガネ。その奥にある目はいつでも優しく細められている。

「屋上で会ったの。わたしを引き取りたいって」その言葉に、子供たちから「えぇ～！」と声があがる。「まぁ、秋葉ちゃんを引き取っていただけるんですか？」あら、と目を丸くして、驚いてる院長先生。まあ、わたしは小さい頃に引き取ってくれる人がいなかった

から、もう大学出るまで蝋燭孤児院にいるんだと思ってたろうし。
「ええ…戸籍はそのままで、育てたいと思っています」美月さんはうっすらと微笑んだ。
「まぁ…それでは院長室で詳しいお話をしましょうか」院長先生が割烹着を外して背筋を伸ばした。
かくしてわたしは、本格的に春坂美月さんに引き取られる方向に向かっていった。

ｓｉｄｅ　音野愁

「お兄ちゃん、秋葉姉ちゃんの何なの？」何となく佐伯さんや美月さん、春夏冬秋葉…あいつと一緒に院長室に入れない雰囲気で、おれは子供たちに混じって出されたお茶をすすっとった。
そこかしこにシールが貼ってあったり、落書きしてあったり、壁紙が剥がれていたり。
やっぱ子供がおったらこんな風になるんやろうか。
そしたら、色の黒い、やんちゃそうな男の子がこう聞いてきた。鼻の頭と、おでこに絆創膏が貼られている。後で知ったけど、名前は「来島新」と言うそうや。
「もしかして、彼氏なの？」きょろきょろする大きな目玉が、しゅんと下を向いた。
「秋葉姉ちゃん、ボクにはそんなこと教えてくれなかったぞ」『うんうん』後ろで頷く子供たち。
「いやぁ、ただの友達…やで。でも、そうやな…兄弟になるかもわかれへんわ」あは、と乾いた笑いを作ってみる。
正直、おれはあの子に関して何も知らん。名前は、春夏冬秋葉。年は、おれと同い年やろうから、多分十三才。それくらいやろうか…あ、そうや、この孤児院に住んでる。それくらいや。
ホント、何の関係も無いねんな。今日、初めて会ったし…。
綺麗な整った顔しとるなぁとは思う。
黒くて長い、艶やかな髪。大きな瞳は深い暗闇と、鮮やかな光を兼

ねた美しさ。鼻筋はすぅっと通っとって、その下に小さな桃色のくちびるがある。
全てのパーツが最高に美しい位置に配置されていて、儚げな美しさを醸し出す。
そやけど、口から出てくるその言葉どこか皮肉っぽくて、他人と喋るとき、間に太い線でも引いてるみたいやわ。
美しさは正義とよく言ったものやんか…だから、あの子は悪そうに見えへんねやろう。
「あ、お兄ちゃん、顔赤くなった！ひどぉい、秋葉姉ちゃんのこと好きなんだ！」
色の黒い男の子の横にいた、幼稚園くらいの女の子が頬を膨らませた。
「おい、お兄ちゃん何てゆう名前なんだ？おれは、来島新」
キジマアラタ…変わった名前や。
この孤児院の子ぉは変わった名前が多いんか？
これも後で知ったことやけど、孤児院にいる児童の三分の一は親の記憶があって、自分の名前や誕生日を知っている。捨てられたわけじゃなく、親が病気や交通事故で死んでしまって、親戚からたらい回しにされて…とか、そういう都合。そういう子たちは、不幸な顔をあまりしない。
それはきっと、小さい頃の幸せな記憶に支えられているのやろう。
のこりの三分の二は、捨てられた子たちや。
彼らは、笑っていても、眼の中とか、しぐさ、一人でいるときの表情に陰りがある。
そして、自分の名前や誕生日を知らない場合が多い。
たまに、院長と、親に面識があったりして、名前を知っていたり、手紙が届いて、名前がわかる場合もあるそうや。
でも、考えたら大概不幸な境遇やな…まあ、不幸自慢やったらおれもドッコイドッコイやろうけど。
「何ぼうっとしてんだよぉ」新くんが泣きそうな顔をした。

「ああ、すまん。ちょっとぼうっとしてしもて…おれは、音野愁や。ひとつ、よろしく」
「…ふたつ、よろしく」
真面目な顔でそんなことを言う。子供の思考回路というものは変わってんな。
がちゃ…。院長室の部屋が開いて、四人が出てきた。
「わたし、美月さんに、引き取られることになったの。ごめん、みんな。ずっと一緒にいよって言ったのに」俯いたあの子の頬に一筋の雫。
なんでやろう、背中がムズムズする。今すぐ駆け寄って抱きしめてやりたい。あの子が泣くのが嫌や。
こんな気持ち、初めてやわ。
これが母性本能とか言う奴か？あ、おれは男やから父性本能か。
ｓｉｄｅ　春夏冬秋葉（あきなしあきは）
あの人…音野くんは、院長室には着いてこなかった。あの人は誰なんだろう。
「どうぞ、おかけになって」と院長先生が微笑む。院長室に入るのは久しぶりだ。
革の応接セット。ソファは古いけれど、ふかふかで、木のテーブルが存在を主張している。
壁紙は、カーキ色のチェック。壁のいたるところに、園児の写真や、この孤児院で育てている野菜の写真、子供たちが描いた絵がある。
あ、あれは、わたしの描いた絵だ。
少し日に焼けた画用紙。カラフルな絵だ。
題名は夢。小学校の卒業制作だ。わたしは、作文、絵、工作の中から絵を選んだ。
描いたのは、小さい頃の自分。自分は、男の人と、女の人に手を繋がれている。満面の笑みを浮かべて。
男の人と、女の人の顔はわからない。顔の部分は影になっていて、笑っている口しかわからない。

周囲には花が咲き乱れ、動物たちが、三人を祝福するかのように描かれている。
一年前のわたしは、何を思って、この絵を描いたのだろう。
その部分だけが記憶からぽっかりと黒い穴のように、抜けていた。
ただ、これを書きたかったんだろうか。
「粗茶ですが」昆布茶と大福をテーブルに並べる院長先生。
カタンと陶器がぶつかり合う音。
「いえ、わたしは結構です」と佐伯さん。
「それじゃ、喜んで」と美月さん。
「あの…唐突だと思いますけど」院長先生がわたしの隣に座った。
「なんですか？」
「秋葉ちゃんを、本当に、本当に、幸せにしてくれますか？」
園長先生の泣き出しそうな声。その声は、わたしの耳にどこかリアルに響いた。
「わたしは、この子の成長を最後まで見守りたいです。できることならば。ですが…あなたが、しっかりと愛情を注いで、この子を育ててくれるのならば…あなたにお任せします」
はい…と、美月さんが頷いた。佐伯さんも、小さく口元を綻ばせた。
「それでは、書類をご用意します」園長先生が立ち上がって、書類を持ってきた。
わたしが見てもわからないくらい複雑で難しそうな感じが書き連ねられた分厚い紙の束。
わかるのは…一番上に書かれてる「保護責任者」とか、「自宅住所」とか。
でも、きっと戸籍とかの手続きをするためのものなのだろう。
「それでは…」そう言うと、院長先生が立ち上がって、部屋を出て行った。
その背中が、すごく小さく見えた。
ぽろ…わたしの瞳から暖かい雫が零れ落ちる。ああ、わたしは今嬉しかったんだ、すっごく。

もう、泣かないって決めたのに…泣いてしまった。
院長室からでると、子供たちが不安げな顔でわたしを見つめていた。
「わたし美月さんに、引き取られることになったの。ごめん、みんな。ずっと一緒にいようって言ったのに」
え…と驚いた顔をする子供たち。
そこにいるみんな一人ずつに思い出があって、大好きで…
わたしは、孤児院で育って楽しかったことに気づく。
今になって気づいたことが恥ずかしくて、思わず俯いてしまう。
「みんな悲しんじゃダメだぞっ！」新くんが大きな声を出した。
「秋葉姉ちゃんにとってきっと良いことなんだよ！だから…だから…笑って見送ってあげないと…ひっく…ダメなんだよ！」
そう言って、作り笑いをした新くんの瞳は、涙で潤んでいた。
わたしは新くんに駆け寄ってぎゅっと抱きしめた。
「あ、秋葉姉ちゃん苦しいよぉ…」
「またいつでも遊びに来いよ！」
「もし、そのおばさんたちとか、色黒彼氏が０，００００１％でも嫌になったら、ココに帰って来いよ！」
「うん…」
「そしたら、おれが秋葉を嫁に貰ってやるからな！」
「あ、おれがもらう！」「ボクだよ！」「秋葉姉ちゃんがあんたたちみたいなオバカのトコにくるわけないじゃない！」「あ、芽莉菜、何だと！悪口だぞ！」「だって、あんなに素適な人がいるんだし…」
「あらあら、喧嘩はやめてね。ほら、秋葉ちゃんも涙を拭いて。ここはあなたの実家です。だから、悲しいことがあったら、ここに帰ってらっしゃい。楽しいことがあったら、ここに電話をしなさい。何もなくても、いらっしゃい」そう言って、院長先生は微笑んだ。
せっかく、涙を拭いてもらったのに…また、涙が流れてしまう。
「ひっく…ありがとう」
そして、わたしは蝋燭孤児院を卒院した。
今回も移動はヘリコプターだった。あらためて、春坂財閥のバック

アップを感じる。
今日の夜から、美月さんの持ってる家にわたしと音野くんと美月さんとで住むそうだ。
全てが怪盗秋を中心にして廻っている。
…眼下に広がる町。
わたしが暮らしていた町は遠ざかり、わたしがこれから暮らす都市が近づいてくる。
「ねぇ…あなたたちに転入してもらう学校のことだけど…」
美月さんが口を開く。
「四葉学園って、聞いたことある？」
「ええ…まあ」
「なんや、それ？農業でもすんのか」
東京にある、いわゆる私立のお金持ち学校だ。
芸能人の子供とか、大企業の令嬢…とにかく、お金がないと通えないような学園。
「そこに入学してもらうことになったわ」
「え…？」でも、でも。
わたしにはそんなところに入る資格はない。
第一、　お金はどうすればいいの…？
「ちょぉ待ち、美月さん。おれにはそんな金はない。あんたが出してくれるやろう？おれのも、この子の分も」
「ええ…そんなの、当たり前じゃない。さぁ、ついたわよ」
そう言うと、美月さんは口だけで微笑んだ。
ヘリコプターが到着したのは高層ビルの中では、少し小さめの二十階建てくらいの建物。

ここは、東京かな…東京タワーと、スカイツリーが遠くに見える。
霧みたいな真っ白い空気の中から植物のように黒いビルが飛び出している。
「大都会や…」と、音野くんが呟いた。

美月さんは、ハイヒールの音を響かせて、屋上から階下へ続く階段を降りていく。
佐伯さんは「ついて来い」とでも言うかのように一瞬だけ、わたしたちを振り返る。
ここがどこなのかも、わからない。
何の目的で、「怪盗秋」になれ…と言われるのかも。
まるで、高熱に魘されながら見る悪夢のようだ。
体がふわふわと浮き上がり、意識は別のところにいるような感覚。
自分が自分でなくなるような、不思議な気持ち。なんだか、悲しい。
これが寂しいという気持ちなんだろうか？
わたしの心じゃまだ幼すぎて、何も確信できない。ぼんやりと気づくことすらも、できないままだ。
ひゅうぅ…
秋にしては冷たい風が、わたしを追い立てるように吹いていく。
音野くんが、わたしを心配そうに見ていた。
ｓｉｄｅ音野愁
春夏冬はんは、ふと、悲しげな表情をする。
誰もみていないような、ちょっとした時に。
もしかしたら、おれもしているのかもしれない。自分でも、気づかないうちに。
おれらが住むことになったんは、高級マンションやった。
「春坂」と高そうな表札。
可愛らしい黄色い花がついた観葉植物。そのよこにある…チワワやろか？陶器でできた、犬の置物。
なんだか、拍子抜けしてしまうわ。もっと、物々しいのかと、思っていた。
佐伯はんみたいな、人が十人くらいいとって…もんのすごい睨まれるんちゃうかと。
よいしょ、と呟いて美月さんが、鍵を取り出す。
かちゃかちゃ…かちん。

金属質な音を響かせ、重そうなドアを開く。
「くつは、適当に脱いでね…」と言いながら、美月はんは小花柄のハイヒールを無造作に置く。
「失礼」佐伯さんがすごいスピードでおれらの横を潜り抜けていく。
「よっ…」おれはくたびれたスニーカーを脱ぐ。
「…おじゃまします」誰かが、今気づいたように呟いた。
「狭いと思うけど、我慢してね」そう言って、美月さんは「美月」とネームプレートのついたドアを開けて、中に入った。
「秋葉さまのお部屋はこちらです、愁さまのはあちらです」佐伯さんがそう言って、「愁」「秋葉」のネームプレートがついた部屋を指差した。
ドアは、周りの暖かな雰囲気に合わせてミルクティーみたいな色をしている。
おれの部屋は、寒色でまとめられた部屋だった。
壁には、ロンドンの夜景の写真が額に入っている。
壁紙は水色で、グレーのステンレスのベッドと机が、置かれている。
小さな黒い冷蔵庫があって、中にはコーラとアイスが入っていた。
クローゼットを開くと、コート類がハンガーに翔けられていて、その横にタンスがあった。
黒い木でできたタンスの中には、どれもオシャレで高そうな服が入っている。もちろん、下着や靴下までも。それに、変なものではタキシードなんかもあったわ。
机をあけて見ると、「四葉学園専用教科書中等部１」と書かれた教科書が山のように入っている。
その他にも、小さなノートパソコンやＩｐｈｏｎ、メタリックブルーの携帯電話。
万年筆やシャーペンの文具類。
それから、黒い革のサイフ。中には五万円も入ってる。
おれは、何がなんだかわからへん気分になって、ベッドに寝転んだ。
ふかふかの、低反発マットレス。

洗剤の良いにおいがして、おれは、まぶたを閉じた。
今日はなんだか、色んなことが起こりすぎて、嘘みたいや。
映画か小説の中に飛び込んでしまったみたいやわ、おれ。
そんなことを考えていたら、眠ってもたみたいやわ。
「うわぁっ！」叫び声で目が覚めた。

第一話　蝋燭を燈して（後書き）

さてさて、話数稼ぎのために分割投稿をしだしました。
養子縁組？のこととかの知識はゼロなので、そこに正確さは求めないでほしいです。
新志はけっこうみてくれてる方いてたんですけど、このオリ小説は人気出ないですねぇ…
文章力ｕｐ希望。

第二話　一目惚れ（前書き）

ノーコメントなのよさ（ピノコ助手より）

第二話　一目惚れ

ｓｉｄｅ春夏冬秋葉

秋葉と、オレンジのネームプレートがついたドア。

この中に、わたしは住む。寝る。もしかしたら、ここで死ぬ…かもしれない。

「わたし…の部屋」

カチャリ。

ドアが静かな音を立て開く。

オレンジ、ピンク、黄色、スカイブルー、ライムグリーン。明るい色がわたしの角膜に移りこむ。

わたしの部屋はパステルカラーだ。

温かみのある木のベッド。マットレスは黄色、布団はピンク。まくらはオレンジ。無造作にクリーム色のくまのぬいぐるみが置いてある。ベッドの横には真っ赤な水玉模様のきのこのランプ。

その向いにあるタンスの中にはセンスの良い、高そうな服がぎっしりつまってる。

横には小さなオレンジ色冷蔵庫。一年に一度も食べれなかったハーゲンダッツとか、レディーボーデンとか高いやつばかり。ジュース類もウェルチェとかやっぱり高いもの。

なんか、お金持ちって不思議な感じだ。

わたしが買いたくても買えなかったものを、いとも安々と手に入れてる。

それに…本棚にあるこれ、推理小説だ。しかも、古本屋でも売ってないような古くて、貴重なもの。確か、絶版になってたと思ってたそれが、新版で出版されてる。これが、権力ってヤツなんだろうか。

「すごい…小栗虫太郎だ…」

無造作に置かれているのは高くて買えなかった合皮のスクールバックや（孤児院のときは、１００均で買った安っぽい布のかばんを使

っていた）、友達に借りて聴いていたＣＤ。
それに、わたしの大好きなイラストレーターさんのポスター。
自分の希望が現実になっている。嘘じゃないよね？
思わず自分の頬をつねってみる。かなり痛い。
もし、わたしが孤児院で育っていなかったら…こんな部屋だったんだろうか？
誰にも言えずにいた、夢のような部屋。
あ…あれ、どうしてわたしの心の中だけにあった理想がわかってるんだろう。
わたしは誰にも言ったこと、ないのに。
何でだろう、どうしてだろう。
心の中を隅々まで虫眼鏡で覗かれたな気分だ。
怖い。美月さんが、佐伯さんが。春坂財閥が。自分の上に、途轍もなく重い荷物を置かれたみたいだ。怖い…わたしは、何でこんなにちっぽけなんだろう。もう、押し潰されてしまいそうだ。
「はぁ…」
こんなので、ハタチになるまでここで暮らせるのかな…
「バカみたい…ただ、自分と美月さんの感性が一緒だっただけなんだって」
そうだよ、何疑ってるの…わたしに良くしてくれる人を。
そう呟いて、自分に言い聞かせる。
力の抜けた体を部屋の壁にもたれかからせる。
壁がわたしの体を支えてくれるはずだったんだけど…。
くるっ！バタン！
「な、何や！」「うわぁあ！」
壁が、まるで忍者屋敷のように回転して、わたしは冷たい床に放り出された。
ごつん。痛む頭を押さえて立ち上がる。
「…いててててて」
回転した壁は、まるで何にもなかったみたいに普通の壁に見える。

壁紙の切れ目も…ないように見える。
「春夏冬はん、どっから来たんや？」
今まで、寝てたのかな。目をこすりながら、音野くんが言った。
「えっと、壁から…じゃないや、部屋から…あれ、これもあんまり合ってない…」
「…」「…」沈黙。
「ぷふっ…」「あはは…」
『ふ…あはははは！』
どっちが、笑い出したのかわからない。でも、気がついたらわたしたちは大声で笑いあってた。
今まで緊張してたのか、糸が切れたみたいに。
「忍者屋敷みたいや！」
「あ、わたしもそう思った」
「ホンマ？一緒や」
「あはは…」
これが、わたしたちの心の壁が崩れた瞬間かもね。
なんて、カッコつけて言ってみる。
壁の破片がそこらじゅうに散らばっていて、たまに踏むかもしれないけど。
でも、こんなに粉々になったら、もう二度とくっつかないはずだ。
良かった、良い友達になれそうかも。
正直、不安だったんだよね。
今まで過ごしてきた孤児院って狭い世界から抜けていくことが。
「なぁ、秋葉って呼んでええか？」
「うん、良いよ。じゃ、わたしも愁くんって呼んでいい？」
「ああ、ええで…これから仲良うしようや」
「うん」
「ほな、握手でも」
『よろしくお願いします』
愁くんの手は、男の子の手だった。

がっしりしてて、大きくて、あったかくって、日焼けしてて。お父さんの手もこんな感じなのかな？
「コーラでも、飲むか？」
「あ、ゴメン。わたし炭酸飲めない」
「ここ、炭酸しかないわ、そっちには冷蔵庫ないんか？」
「…たしかあったと思う。わたしの部屋、来る？」
「忍者扉、そっちに行けるんか？」
「うん、多分大丈夫だと思う」
Ｓｉｄｅ音野愁
バタン！
大きな音がして、目を開けるとひっくりかえった春夏冬はんがおった。
「春夏冬はん、どっから来たんや？」
なんか、びっくりして変な質問してまう。
「えっと、壁から…じゃないや、部屋から」
天然？壁に住んでるんか、あんた。
「…」「…」
一瞬だけ、静かになる。
「ぷふっ…」「あはは…」
『ふ…あはははは！』
緊張の糸が切れたみたいに、おれらは笑った。
笑うと、春夏冬はんの目が三日月みたいになって、すごい優しそうになった。
なんか、険しそうやった表情が柔らかくなって、可愛いやんけ…とかって別に思ってないけど。
めっちゃドキッってなった。
「なぁ、秋葉って呼んでもええか？」
「うん、全然良いよ。わたしも愁くんって呼んでいい？」
「ああ、ええで…これから仲良うしようや」
なんやろう、この感覚は。久しぶりや、おれ。

知りたい、近づきたい、触れたい、解かりあいたい。笑いあいたい。
今まで、無意識に人間関係を避けてきたおれにとっちゃ、何年ぶりかの出来事かもしれへんわ。
「うん」
「ほな、握手でも」
『よろしくお願いします』
おれの掠れた低い声と、春夏冬はんの高くて透き通るような、それでいて芯の強い声。
初めて触れた彼女の手は白くて、華奢で、暖かかった。おれの黒くてゴツい手より二周りくらい小さい。
なんとなく、触れたところが熱くなってきた気がして手を離す。
「コーラでも、飲む…か？」
「あ、ゴメン。わたし炭酸飲めない」
おれは冷蔵庫をあさりながら「ここ、炭酸しかないわ、そっちには冷蔵庫ないんか？」
「…たしかあったと思う。わたしの部屋、来る？」
「忍者扉、そっちに行けるんか？」
「うん、多分大丈夫だと思う」
えと、この辺に…と小さく呟いて春夏冬はんは羽織ってたパーカーのポケットを探る。
「何してんねや？」
「あ、ちょっとね…シルシを貼っておこうと思って」
そう言って取り出したのは、真っ黒いシルクハットをかぶったピカチュウのシールだった。
「何や、これ？」
「あのね、孤児院にいたときは小さい子が泣いたときとかなだめるために持ち歩いてたの。ほら、小さい子ってこういうの好きじゃない？」
そういえば、孤児院の机や椅子にはこんなシールがペタペタと貼られていたっけ。

「ああ、そやな」
頷いたけど、おれは小さい子とあんまりしゃべったことないからようわかれへんわ。
「それじゃ、これを目印にして…」
コツコツと手で壁を叩く。
コツコツ、コツコツ…コツコツ。
音が一段階高くなったところにペタリと貼り付ける。
「よいしょ…よし」
シールの貼ってあるあたりを強く叩くと小さな扉ができる。
小さいと言っても1メートルくらいのドア。おれでも腰をかがめたらくぐれそうや。
Ｓｉｄｅ春夏冬秋葉
「午後の紅茶ロイヤルミルクティー」よし、これにしよう。
わたしは小さなオレンジの冷蔵庫を開けてペットボトルの紅茶を取り出す。
「それじゃ、改めて、カンパイ」
一気飲みをするように天井を見上げる。
真っ白な天井を見上げていると、誰かの声が聞こえるような木がした。
秋葉様、愁様は隠し扉を発見した。
どうやらお二人は打ち解けられたようだ。
第一段階、終了。
冷静な研究者のような、小さな呟き。そんな声が聞こえたような気がした。
「誰…」
「ん、どうかしたんか？」ぷはぁっとコーラを飲み干した愁くんが聞いてくる。
「ううん、大丈夫」
Ｓｉｄｅ音野愁
ふわぁあああ…やべぇ。

思わず口を押さえるくらい大きい欠伸や。
肩とか腰とかがガチガチに固まっとる。なんでや。
たしか昨日は風呂入った後、十一時ぐらいまで秋葉と色々しゃべっとって…
あれ、ってことはここは秋葉の部屋なんか？
おれはベットにもたれて寝ていた。
お気に入りのなんだと紹介してくれた本をまくらに彼女…秋葉は熟睡していた。
予想以上に長く濃い睫毛。彼女の呼吸と同時にふるえとる。薄く開いたくちびる。
長い髪の毛は寝癖でくしゃくしゃになっているし、頬には本の型がついている。
けれど、綺麗だと思ってしまう。
「綺麗やな、お人形さんみたいやわ」前にも思ったようなことを呟いてる。
彼女に聞こえればええのに。おれの気持ちに気づけばええのに。
本当に変な気持ちや。会って一日も経っていないのに。
「…さんなの？」
小さな呟きが彼女の口から漏れる。掠れるような小さな声。
「え…」
「そうなんでしょ？お父さん、お母さん！いかないで…。わたしを捨てないで…よ…」
ぽろりと、彼女の頬を雫が伝う。親のことを、思い出しているのだろうか。
昨日、孤児院の生活をあんなに楽しそうに話していたのに。
本当にみんな良い子たちでね…わたし、すっごく幸せだったんだから。
あ、ホントだよ。学校でも、孤児院でもすっごく楽しかったんだ。
おれには短い間だったが、親との幸せな生活があった。親父、おふくろ。そういわれると、おぼろげながら脳裏に浮かぶ笑顔。

でも、彼女にはその笑顔の記憶さえもない。顔すらわからない。もちろん声も、背丈も。
「可哀想やな…」
守ったりたいけど。
可哀想とか、守りたいって思う時点でおれは秋葉を見下しているんちゃうやろうか。この気持ちは純粋なんやろうか。
自分を優位に持ち上げたくて、彼女を見下しているんじゃないだろうか。
そんなわけないやんけ。と笑う自分がいる。でも、そうかもしれへん。と頷く自分もいる。
人の気持ちなんてわかれへんもんやね。どこかの誰かが言った言葉。
頭が混乱してるんやわ。
「う…ふわあ」
秋葉が眼を覚ました。
「あ…おはよう愁くん」
「おはよーさん」
「あは、愁くんすごい寝癖だよ？」
「秋葉ちゃん、おっはよう！」
バタン！とドアを開けて入ってきた美月さんの目がキョトンとなる。
「あら、始めての夜？きゃははっ！」
横を見ると、秋葉は真っ赤になっている。
「下ネタか」と佐伯さんが低い声で呟いた。「とりあえず、この制服に着替えて下さい」
そう言って、どこからかブレザーの制服を取り出す。
「あ、ありがとうございます…あ、ちょっと愁くんは自分の部屋で着替えてよ？」
ｓｉｄｅ春夏冬秋葉
ユメヲミタ。
これは夢だと気づいているのに、その夢は恐ろしいほどにリアルだった。

夢と現実の区別がつかないくらいに…。
孤児院の屋上で本を読んでいる自分。
読んでいる本は、友達がくれたボロボロの漫画。
「シェリングフォードの追跡」と書かれた表紙。
鬼畜っぽい笑みを浮かべた真っ黒いコートのおじいさん。
不敵な、自信に満ちた笑顔の青年と小さな黒猫。
わたしはふと漫画から目を逸らし、空を見つめた。
わたしの心を映し出しているかのように、分厚い雲がほこりのようにただよっている。
「雨…降り出しそうだな」
そう呟くと、目の前が真っ白に光り、わたしはどこかに弾き飛ばされるような感覚に襲われる。
「秋葉、遊園地に出かけようか」
「うん！観覧車乗るぅ！」
「お弁当も作らないとね？ママ、頑張らなくっちゃ」
誰か…男の人と女の人がわたしの方を見て笑っている。
声は機械を通したみたいな、嘘くさいもの。
自分の声だけが、現実の幼かったころと一致している。
顔は見えるんだけど、数秒後には忘れてしまいそうな特徴のない顔。
たった一つの特徴は、ものすごく綺麗にに整った顔だってこと。ただ、整いすぎてて記憶に残らない感じの顔。
そう、ひな祭りのお雛様みたいな顔だ。左右対称で、それはとっても美しいことなんだけど。
あれ…笑顔が遠くなっていく。
「ゴメンね…秋葉」
「遊園地にはいけないんだ、おまえには孤児院にいってもらうから」
え…
「ちょっと、待ってよ！」
「ゴメンな…」
お父さん達の姿が暗闇に消えた。

ヤダ、行かないで！
「わたしを捨てないでよ！」
自分の声で目を覚ます。
頬には涙の痕があって、我ながら痛々しい顔だ。
Ｓｉｄｅ音野愁
「えっと、今日は二人には徒歩で四つ葉学園に行ってもらいます」
「はい」
「ほ～い」
まだ眠りから覚めないような頭でぼぅっと考える。
秋葉はちょっとブカブカするブレザーの袖を調節しようと悪戦苦闘している。
冬服はブレザーの上下やけど、今は秋やから、クリーム色のセーターと黄緑のリボン。黒いチェックのプリーツスカート。そして、茶色のローファー。
普通中学の女子の制服ってセーラーやのに、やっぱり私立やから、公立とはちゃうんかいなぁ。
四葉学園の名前の通り、校章は四葉のクローバー。スカートに四葉の刺繍がしてあったり。
ちょっとお洒落な感じがするわ。この制服って多分高いんやろうな。
おれは蒼っぽい黒のブレザーのズボンとワイシャツ。ネクタイは黒のチェック。
クローバーの校章はちょっと女っぽくて恥ずかしいけど、中々ええんちゃうかな？
おれは十分似合っていると思うんやけど「なんか着られてるっぽいね、わたし」と秋葉照れたように笑っとった。
「…たく、愁くん聞いてる？学校の勉強はわかると思うけど、今度からフランス語と英語を習ってもらうからね？わかった？あ、そうだ。言い忘れてたっけ？ずばり、大金持ち学校です。馴染めないかもしれないけど、頑張ってね」
ものすごく気安く言われた。

フランス語と英語って！英語はちょいわかるけど…
フランス語なんか「ボンジュール」と「モナミ」しか知らへんねやけど、おれ。
朝起きたての美月さんの髪の毛はパーマか寝癖かわからんほどどこもかしこもくるくると跳ねまくっている。
「それじゃ、佐伯が朝ごはん作ってくれてるから、そこの椅子に座っといて？」
といって、ダイニングらしき机と椅子を指差した。
携帯電話を取り出し、忙しそうに誰かと話している。
「……ちょっと、岬、飛行機が遅れてるってホントなの？…まったく、シナリオが狂っちゃうじゃないのよ…ゼーレのシナリオ？…何それ？…あんたって子は、よくこんなときの冗談言えるわね…くすくす笑ってんじゃないわよ…たく、あんたの技術を買ってんだからね、あたしは」
アルフ？誰やろ。商談かなんかで失敗でもしたんかいな。
このマンションはドアを開けるとすぐ玄関とリビングがある。恐ろしくデカいテレビと高そうでおれには座れない黄色のソファ。そしてリビングの横がダイニングキッチンだ。
じいちゃんらと住んでいた頃は台所と卓袱台だったから、カタカナで言うのはどっかくすぐったい感じや。
ダイニングキッチンの横には風呂、洗面所なんかの水周りが固めてある。
ダイニングとリビングの間を真っ直ぐ奥へ進むと左右に二つずつ、計四つ部屋がある。
一つの部屋が十畳ぐらいあるから、このマンションはかなり広い。
それをおれ、秋葉、美月はんで一つずつ分けている。
あと一個は…なんやろ、あまり？佐伯さんがここに住むんは不自然やし。
どうやら、このマンションの最上階…このフロアは全て春坂美月のものなんだとか。

最上階でかなり広めに間取りがとられているので、部屋は五つほどしかない。
その中の一つがこの部屋。
もう一つは美月さんの事務所。
あとは、適当に物置に使われている部屋、応接用の部屋らしい。
ていうか、家は一個で十分やろうと思たけど、金持ちは家もいっぱい使うんやな。
自分が無知な幼児になったかのような気分や。どれもこれも自分の知らないもののよう。
鏡に映った色の黒い自分の顔を見てほっとする。
今までと変わらない自分の顔。…そのうちこれも変わってしまうんやろうか。
「できました。口に合うかわかりませんが」
佐伯はんが少し自信ありげに微笑んだ。
この人は表情とかがあんまし変わらないから、しぐさとか声の高さとかでこっちが気持ちを察しないといけないのかもしれへん。おれは出会って一日くらいやけど、そう思っていた。
机に無造作に置かれた朝ごはん。
真っ白なお皿の上にはこんがりと焼かれたトーストの食パン。その上には半熟の目玉焼き。
トマトやバジルなどで彩りも考えられている。
「ミルクティーでいいですか」
そういって湯気のたつ暖かいミルクティーを置いた。
なんでやろう、ありがたいとは思っているんやけど、絵に描いたような幸せな風景があって、おれはここに溶け込めるようになるんやろか、と不安になる。
「あ、ありがとうございます！」
「ありがとう佐伯さん」
おれの声も、秋葉の声も、すこし上ずっていてなんだか恥ずかしかった。

「はい、いただきまぁす」
パチン！と美月さんが両手を合わせいただきます。と呟く。
「いただきます」
「い…ただきます」
おれがじいちゃんと住んでた頃は食事前と後にお祈りをしとったから、なんか違和感あるな。
神よ、仏よ、この糧をありがたく頂戴いたします。
おおきに、神様。おれ、多分今幸せやわ。
ＳＩＤＥ春夏冬秋葉
「「ごちそうさまでした」」
食卓を囲んだ四人で声を合わせ、ごちそうさまをする。
「それじゃ、歩いていってねぇ。あたしは二度寝するからぁ…」
美月さんはふわぁあと大あくびをして、自分の部屋へと歩いていく。
「それじゃ、佐伯さんいってきます。愁くん、行こう」
「いってらっしゃい」
あたしは革のカバンをかつぐと、玄関で運動靴を履き、外へ出た。
清々しい朝ってのはこんなのを言うのかな。
ＳＩＤＥ音野愁
学校までの道のりは思たよりちょっと遠かった。
おれと秋葉はいろいろなことを喋り、渡された地図にそって歩いていた。
まわりにはおれらの着ている制服を着た上品そうな学生が歩いている。
お金持ち学校の人は「ごきげんよう」とかリアルに言うんやろうか？
それはそれで、めっちゃ面白いやないか。大阪人の血が騒ぐわ。
マンションの前は国道何号線…やったかは忘れたけど、けっこう大きい道。
アスファルトの黒が真新しいから、最近できたんやろか。
マンションから学校へはだいたい7百メートルくらい。
その間に商店街や小さなパン屋さん。幼稚園からは子供特有の甲高

い笑い声。
下町っぽいなぁ…なんか。
おれがじいちゃんたちと住んでいた町は田園風景の広がるまぁそこそこな田舎だった。
じいちゃんとばあちゃんはおれの悲しい記憶に優しく蓋をしてくれた。
そうこうしているうちに大学くらいデカい学校が見えてきた。
薄い茶色の煉瓦造りの校舎と、色とりどりの花が咲き乱れる花壇。
中世のような雰囲気の建築だ。
芝生や砂地、アスファルトのようなもので舗装された運動場。森のような木の生えた部分、玉蜀黍か何かを栽培しているのだろうか？
大きな真新しい体育館の横に耕された土と背の高い草。

第二話　一目惚れ（後書き）

なんか疲れた。

第三話　黒い腹巻（前書き）

実はもう、ワープロのほうでけっこう書きあがってるんです。
でも、なんか自信がないので投稿は控えていたのですが…
ヤケになったので投稿します。

第三話　黒い腹巻

ＳＩＤＥ　春夏冬秋葉

あの孤児院を丸ごと四つくらい入れてもまだまだ余裕があるくらい広い学校だ。

わたしはここで何を見つけられるんだろう。

ここで何を学ぶんだろう。わたしは…成長できるのだろうか。

「…秋葉？何、止まってんねや？」

「え？」

気づくと、愁くんはわたしより数メートル先で振り返っていた。

「あ…ごめん。ちょっと考え事してた」

わたしはスクールバックを肩にかけ直すと、校門の方へと走り出した。

騎士の持っていそうな槍か剣みたいなデザインの黒い門。

直角に開かれた門にもたれ掛るように黒いスーツを着た女の人が立っている。

多分、登校のピークは過ぎたのか、校門と校舎の間にはあまり人がいない。

女の人はわたしたちに気づくとゆっくりとこっちに歩いてくる。

「…あ、春夏冬さんと音野君ね？」

黒のスーツを着た、焦げ茶色の髪をポニーテールにした派手な整った顔をした、小柄な女の人だ。年は三十歳くらい。

「わたしの名前は内川香澄。貴方たちの担任のセンセ。音楽を教える予定でぇす」

「よろしくお願いします」

「よろしゅう頼むわ」

「えっと、春夏冬秋葉さんと…アキナシアキハでよかったわよね？あなたが音野愁くん。あら、可愛い顔しちゃって。二人は付き合っ

てるの？」
そう言いながらわたし、愁くんを指差す。
「違いますよ…冗談でも、笑えないです」
「え…あの、ちゃうでっ」
「…それじゃ、行きましょうか。あなたたちのＩＱは極めて高かったから、途中編入だけど、Ａクラスに編入してもらうわね。まあ、大丈夫でしょう」
「え…あ、はい」

そうこうして、１－Ａと書かれた教室の前にたどり着いた。
ガラガラと音をたててドアが開き、生徒たちの喋り声が廊下に漏れてくる。
「今日、転校生来るんだってよ」「へぇ、何人？」「さぁ…」「おい、お前知らずにそれ言ったわけ？」「情報管理会社の跡取りが聞いてあきれるぜ」「うっせーよ」「男女一人ずつで二人来るらしいぜ」「へぇ…でもＡに途中から来るなんて、かなり頭良いじゃん」「でも、お前アホだよな。テストで赤点以外とったことねーよな」「う…あれ、そーだったっけぇ？記憶にないな…」「まさか、てめぇ裏口入学…」「大正解！」「…って、男子なんの話してんのよ！」「転校生の男子、イケメンかな？」「お、夢見る乙女。どうせ恋愛しても結婚できないじゃん。家柄のことあるし」「あ…政略結婚だよね…はぁ、マジでヤル気なくすわ」「言えてる…どうせどっかのボンボンの不細工なヤツと結婚するんだよあたし。それか、どっかのじーさん」「あ、内川先生来たみたい」「あ、後ろの二人じゃない？」「へぇ、どっちも顔良いじゃん」「芸能人の子供タイプかー？」「いよお、二世！！」「おらも二世じゃねーの？」
感想…金持ちって、けっこう良くしゃべる。しかも超失礼。
金持ちどもめ…
「んじゃ、名前書いて～字間違ったら困るし」
きゃははっと内川先生が振り返って笑った。

「はい、みんな注目！！」
よく通る声が教室を沈める。
「あ、はい」
春夏冬秋葉…と。
フリガナは、ふっといた方がいいかな。アキナシアキハっと。
「えと、春、夏、冬、秋、葉っぱの葉って書いて春夏冬秋葉です。よろしく」ほわっと愛想笑いを浮かべる。
「おれは音野愁。大阪から来たんや。まぁ、よろしゅう頼むわ」横では愁くんが苦笑いをしている。
「それじゃ、二人の席はあの一番後ろの…二つ空いてるとこね」
「あ、はい」
「どーも」
わたしの席は窓際の一番後ろ。愁くんはその横。
わたしの前には気の強そうな茶髪のツインテールの女の子。その癖、瞳はどっか諦めてる雰囲気。ななめ前…愁くんの前には背の低い中世的な茶髪の男の子。みんなどっか上品そうな笑みを浮かべている。
机の中には教具や教科書、ノートがぎっしり入っていた。
「次は選択で音楽の歌唱か演奏なんだけど…二人はどうするの？」
先生の声に慌てて答える。
「あ…わたしは歌唱で」
「…んーじゃ、おれもそれで頼もか」
「春夏冬さん。だったっけ？アタシと一緒に行かない？」
さっきの気の強そうなツインテールの女の子。
大きな瞳と上向きの小さな口、小柄なのが印象的だ。
「アタシ、碇川奈央。女優の碇川由衣の娘なの」
と、どこか自慢げに、どこか疲れたように微笑んだ。
碇川由衣…女優？聞いたことないなぁ。わたし、テレビって音楽番組しかみないし。
歌は自分でもそこそこ上手いと思ってるけど、音符読めないしな。
って、思考がズレてるし。

「よろしくね、碇川さん」
「あ、それとこいつは秋野真琴。秋繋がりってことで仲良くしてあげてね。アタシの幼馴染」
小学校四年生にも見えなくもない、身長の低い男の子。
けっこう小柄な碇川さんより、まだ小さい。ふわふわの茶髪に、真っ青な瞳。ハーフかな。
「春夏冬さん…だっけ、よろしく頼むぜ」
顔に似合わない、てやんでぇ口調。
それでもその子が笑うと、孤児院にいた頃を思い出してしまう。
みんな…可愛かったな。純粋で、こんなわたしを慕ってくれて。
「あ…よろしく」
「こいつの親父は警視総監やっててて、あたしのママが一日署長やったときに知り合ったんだよ」
「へぇ…」
警視総監の息子。顔に似合わず。
「ま、三男なんだけどよ…これから仲良くしような！あ、愁くんも」
それじゃ、行こうかと歩き出す二人。
話をしているあたしたち四人を話しかけたそうにじぃっと見つめるクラスの子たち。
きっと、色んなことを聞き出したいんだろう。根掘り葉掘り。
「あの…教科書とかは？」
「ん？いらねーぜ？」
真琴くんが教室の出口のところで、はやくはやくと手招きしてる。
「音野くんは関西から来たのはわかるけど、春夏冬さんはどこから転校して来たの？」
「あ、わたしのことは秋葉で良いよ。わたしは東京の端っこの方から来たんだけどね…」
「ねぇ、もしかして二人は知り合いなの？あ、アタシのことは奈央で」
「あ、おれは真琴で。確かに、二人とも仲良さそうだしな」

「え？ああ、そう。ルームメイトってやつだよ？親戚のおばさんたちと住んでるの」
わたしの言葉に赤くなる二人。
「二人は、付き合ってんのか？」
真琴くんの言葉に愁くんが真っ赤になった。
ＳＩＤＥ碇川奈央
碇川奈央。
今、７クール続きで連続ドラマに出演してるそこそこ有名女優、碇川由衣。の娘。
四葉学園に通う、そこそこ頭も良くて顔も良い、そこそこ運動もできる。そんな子供。
ま、友達はいないけど。
なのに、何でだろう。心が、満たされない。退屈なんだ、日々が。
わたしの心の中の湖は一度も波を起こさずに静まり返っていた。
そんな時に、転校生が来るって噂を聞いた。
そんでもってあの二人…秋葉と愁くんが現れた瞬間、アタシの中の面白いことメーターが、反応を示しってわけ。
そいつらを一目みて驚いた。アタシのメーターの針はレッドゾーンを指しているんだ。
うっすらと微笑んでるその顔の奥底で暗く黒い宝石が鈍い光を放ってるみたい。
こいつら、なんか暗い部分持ってるんじゃないの？
恐ろしいくらいに整った顔をした少年少女だった。
一方は真っ白い肌に真っ黒い瞳と長い艶やかな髪。
もう一方は浅黒い肌に、真っ黒いサラサラの髪と、焦げ茶色の瞳。
アタシの脳天に台風級の雷が落っこちたのかと思った。
こいつら、只者じゃない。近くにいたら、アタシにも巻き添えが来るのかもしれない。
…それは超×３くらいに面白いことじゃない！
この退屈な毎日を吹っ飛ばす、ミサイル級の面白さ。

となりの席の真琴に話しかける。
あ、こいつはアタシの腐れ縁の幼馴染みたいなもの。
あたしのママが警察の一日署長ってのを若いときにやった縁で、たまに遊んだりしてたらなんか幼馴染になっちまった。
ものすごい童顔かつ、チビ。今でも言い張れば初等部の中学年くらいに見える。
ふわふわの天パにくりくりの蒼い瞳。つんととがった小さな鼻。
真琴のおばあちゃんがたしかイギリス人でクウォーターなんだよね。
黙ってたら純粋そうで、可愛らしい雰囲気だけど…正体はめっさ腹黒。
他人の不幸は蜜の味ってのが座右の銘？ってぐらいに。
去年の誕生日…冗談で真っ黒の腹巻をわたしたら一週間口を聞いてくれなかった…
こいつはそういう奴なのだ。
嫌いなやつには徹底的にかわいい顔のお面をつけて接する。
一人称もおれ→僕だし。
顔にかぶるぐらいじゃなくって、着ぐるみぐらいかぶる。
ま、キレたら大谷育江（ピカチュウの人）バリの可愛い声してものすごい罵詈雑言を並べやがる。
アタシも真琴からすれば「裏表激しすぎだっての」らしいケド。
そぅっと真琴の耳たぶを引っ張って話しかける。
「ってーな、何すんだよ奈央」
呼び捨てにすんじゃねー、テメーがそんなんだから付き合ってると思われんだよ。
お前のファンの先輩からイジメられかけたりすんだよ。腐れ縁の友達なんだよ、アタシたちは。テメーのせいだぞばっきゃろぉ。
心の中でそう思いながら笑う。
「あの二人…面白そうな感じしない？」
「だな。暇つぶしの良い玩具になってくれそうじゃねーか」

「春夏冬さん。だったっけ？アタシと一緒に行かない？」
にっこりと『良い人』の笑顔を浮かべて二人に話しかける。

第三話　黒い腹巻（後書き）

腹黒のロリ系キャラ好きです。
黒ハニー先輩とか超良いんですけど。
声優ネタいれちゃったことに関しては「我が辞書に後悔の二文字はない！！」と言っておきます。

なんか自分で書いておきながら迷走してるわー…Ｏｒｚ

音楽室

ＳＩＤＥ　春夏冬秋葉

音楽室は音楽室というのが勿体無いくらいの設備が整っていた。
大抵の楽器はあるわよ、と言う内川先生の言葉通り、エレキギターとケニアの民族楽器が並んでいたりする。すごいセンスだな。
広い音楽室にずらぁっと椅子と机が並んでいるスペースがある。
大きな電子黒板の前に五列くらい。
勿論、折りたたみの金属椅子じゃない、しっかりしたビロードと木の椅子。
机はシンプルだけど、使い勝手の良さそうな…ようするに高そうなもの。
「じゃ、ここに座ろうよ」
そう言うと、真琴くんが前から二番目の列の四つ空いてる椅子に座った。
真琴くん、奈央、わたし、愁くんの順番で横並びに座る。
ぼぅっとしていると頭の中で、想像が湧き上がってくる。わたしの両親が今、生きているとしたら…どんな気持ちで暮らしているのだろう。わたしの存在を、彼らの心の隅で良いから留めておいてほしい。
後悔を少しでもいいからしてくれたらいいのに。
どうして、こんなことを望んでいるのだろう。
親のことなんて、気にしないと決めたはずだったのに。
「ねぇ、秋葉ちゃん聞いてる？真琴ね…超音痴なんだ」
ゴメン、何の脈略よ？
「んじゃ、なんか歌ってみぃや。そうやなあ…ドナドナでも」
今まであんまり喋らなかった愁くんが口を開いて笑った。
「そだね。歌って歌って」
とわたしも言う。

「うん、わかったぁ…ドナドナドーナドーナぁ！ドナドナドーナぁ…ふごっ！」
…なんか高い声を持て余してるみたいな歌い方。
音を伸ばすとどんどん高くなっちゃうんだ…。
てかっ、何でその部分を選択？
ちなみに最後の『ふごっ』は真琴くんの口を奈央が両手で塞いだ音。
「奈央っ。ちょ、何するんだよぉ！」
「はーい、授業始めるわよ…」
ＳＩＤＥ　音野愁
「それじゃ、校歌歌うわよ」
校歌なんか、聞いたことないんやけど。
ゆったりしたメロディで歌われる合唱。
横を見ると秋葉は歌っている…ように見せかけて口パクで誤魔化している。
おれたちは、自分の気持ちを何度誤魔化して来たんやろう。
押し殺して、蓋をかぶせて、それから離れることに必死になって…
直視することを恐れとって…。
なぁ…おれはあほなんやろうか？いや、あほと違う。ばかなんや。
それから、おれはぼぅっと過ごしていた。
四葉学園の授業は恐ろしく速いスピードでついていくのはかなり難しい。
昼過ぎになって、秋葉は早退していった。気分が悪いと言って。
おれも、早退すればよかったわ。所詮、根は貧乏性。
金持ち共の中で笑っているのは…疲れるわ。
「どうせ…おれは貧乏やった…」
小さな一軒家で、じいちゃんとばあちゃんと住んでいた。
汚くて、漬物臭くって、狭かったけど、それはおれにとって掛け替えの無い我が家だった。
父さん母さんと住んでいた真新しいアパートと同じくらいに。
クラクメートからすれば年寄りくさくてダッサい家だったらしいけ

ど。
おれにとっては新築の高級マンションよりもキラキラと輝いてみえた。
ここの生徒たちはきっと、高級マンションの最上階に住んで、バカ高い料理を毎日食っているんだろう。
それは、おれにとっちゃあもう言えた文句じゃない。
自分だって、何の苦労もせずに、高級マンションに住んでるんやから。
でも…そんな綺麗な暮らしよりも大切な…何かがあるんじゃないだろうか。
駄菓子屋の店先での大喧嘩。当たりつきのガムに一喜一憂して、下品な話題で大はしゃぎし、音程の外れた歌をみんなして歌ったっけ。
そんな記憶は大人になったとき、糧になってくれるはずや。
そんなん言うてるおれやけど、学校の子ぉらとつるんどったんは小学校の…三年ぐらいまでや。
自分が周りと違って異質やってことに気づいたんやろうな…おれ。
おれは憐れまれるべき人物なんだろう。何しろ、両親を殺されている。
こんな状況、普通有り得へんやろ。
キーンコーンカーンコーン…滝廉太郎の憾が鳴り響く。
この学校のチャイムはすべてこれで統一されとる。
こんな縁起悪い曲名の歌を気に入ってかけてるヤツって…誰なんやろ。
理事長やったら一回会うてみたいもんやわ。
「ふわぁあぁぁぁあぁ…」
やっと…やっと一日終わったわ…ゆっくり歩いて帰ろか。
ブブブ…
おれのポケットの中で振動するケータイ。メタリックブルーの最新型機種。
「はい、もしもし…」

「あ、愁くん？あたし、美月。ちょっと怪盗の修行がてら美術館に行くから、学校に迎えに行くからね。それじゃー」
「えっ、ああ、ちょっと…」
話術で大阪のおばちゃんに勝てるな。この人。
おれが口を挟む間も無く、プツッと切れた電話。
…美術館に行くって…怪盗としての目を肥えさすんやろうか？
「あのさ、愁。おれの家の車が迎えに来るんだけど、一緒に帰らねーか？」
真琴だ。その横には碇川。
「あ…すまん。今日、家の人が迎えに来てくれはるから…また、懲りんと誘ったってぇや」
おれはそう言うと、カバンを手に持ち、教室を出た。
季節は秋だ。用務員の人が積み上げた枯葉の山が、懐かしい雰囲気がする。
じいちゃんの家の小さい庭に柿の木があって、秋には落ち葉の掃除がめっちゃ大変やった。
落ち葉を固めて、そこにいらんくなった新聞紙とかも混ぜて焼き芋とかよくやったなぁ。
じいちゃんがしわしわの手で焼き芋を半分に折って、二人で食べた。
「懐かしいって…こんな気分なんやろうか」
校門のところまで来ると、大きなリムジン？ベンツ？フェラーリ？よくわからんけど、高そうな車が停まっている。
乗っているのは白ひげの執事さんだったり、黒サングラスのいかつい男だったり。
その中のひとつ、一際目立つ真っ赤な車から、佐伯はんが降りてくる。
冠婚葬祭どんな場でも行けるようなスーツ。
黒のスーツ、白いワイシャツ、黒のネクタイ、黒の革靴。
言われて見ればって…別に誰にも言われてへんけど、佐伯はんも大概綺麗な顔付きやな。

ただ、無感情で無愛想な感じがするけど。
「愁さま、失礼ですが…早くなさってください」
おれと一瞬だけ目を合わせると、すぐに背を向け車の運転席へ。
まったくムダのない動きにびっくりする。

音楽室（後書き）

歌はいいねえ、リリンの（（殴

…音痴キャラがすごく好きで自重しきれなかったよw

小説家になろうでは、異世界ファンタジーが人気あるのかな。あたしゃジョブナイルミステリーを頑張ってるけど、人気でないのな。

コ哀も思いつかないし、最近スランプです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7835k/

春夏秋冬。

2010年10月13日23時08分発行